とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0915
施設名	山手こひつじ保育園
施設所在地	東京都府中市白糸台4-13-8
法人名	社会福祉法人東京山手マリヤ会

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

砂

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

日頃より子どもたちは砂場での遊びに親しみ、砂に触れる、握る、すくうといった関わりを通して興味関心を示していた。特に、保育者の関わりや友だちの遊びの様子に影響を受けながら、少しずつ自ら関わろうとする姿や、繰り返し遊ぶ中で遊び方を広げていく様子が見られていた。

砂は身近でありながら、乾いた状態や濡れた状態によって性質が変化し、形を作る・崩す・見立てるなど、多様な遊びへと発展する素材である。また、一人ひとりの発達や興味に応じて関わり方を変えることができるため、乳児期の感覚的な体験から幼児期の協働的・探究的な遊びまで、連続した学びを支えることができる。

園としても、子どもが主体的に環境に関わりながら学びを深めていくことを大切にしており、砂遊びはその実践に適した活動であると考えた。そこで、子どもたちの興味関心を起点に、砂という素材を通して感覚的な体験から探究的な学びへと発展していく過程を捉えることを目的として、本テーマを設定した。

２．活動スケジュール

年間を通して砂場での活動を継続的に行った。

・砂に触れる、握る、すくうなどの関わりを通して、砂の感触に気付く。
・乾いた砂や濡れた砂など、状態による違いに興味をもち、繰り返し試してみる。
・スコップやバケツ、型抜きなどの玩具を使いながら、砂の扱い方に慣れていく。
・型抜きや見立て遊びを通して、自分のイメージを形にしようとする。
・友だちと同じ場で遊ぶ中で、関わりややり取りが生まれていく。
・砂や水を組み合わせて山や川などを作り、形の変化や性質に気付く。
・試行錯誤を繰り返しながら、「どうしたらできるか」を考え、遊びを発展させていく。

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

子どもたちが自ら興味をもって砂遊びに関われるよう、スコップやシャベル（大小）、バケツ、カップ、型抜き、ふるいなど、様々な種類や大きさの道具を準備した。子どもが発達や興味に応じて自由に選択できるよう、手に取りやすい位置に配置し、主体的に遊びに向かえる環境を整えた。

また、砂の状態や遊びの広がりに応じて、水を使えるようホースを用意するなど、砂や泥の変化を十分に感じられるよう工夫した。衣服の汚れや気温にも配慮しながら、安心して全身で遊べる環境を整えた。

乳児では、安心して砂に触れられるよう、砂をあらかじめほぐしたり、保育者がそばで見守りながら関わることで、無理なく素材に親しめるようにした。一方、幼児では道具や環境を活かしながら、自分たちで工夫して遊びを発展させていけるよう、見守りを中心とした関わりを行った。

さらに、安全面にも配慮し、砂を口に入れないよう複数の保育者で見守る体制を整えるなど、安心して活動に取り組める環境づくりを行った。

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

活動では、子どもたちが砂や泥に主体的に関われるよう環境を整え、砂の感触や性質を感じながら遊びを展開していった。はじめは砂に触れる、握る、すくう、落とすといった基本的な関わりを通して、素材そのものに親しむ姿が見られた。また、乾いた砂や濡れた砂の違いに気付きながら、繰り返し試す様子も見られた。

次第に、スコップやバケツ、型抜きなどの道具を用いて砂をすくう、運ぶ、形を作るといった遊びへと広がり、できた形を崩すことも含めて変化を楽しむ姿が見られた。さらに、型抜きを食べ物に見立てたり、ごっこ遊びへと発展するなど、自分のイメージをもとに遊びを深めていった。

発達が進むにつれて、砂や水を組み合わせて山や川、トンネルなどを作り、形の変化や流れを楽しむ姿が見られた。思い通りにいかない経験を通して試行錯誤を繰り返しながら、「どうしたらできるか」を考え、遊びを発展させていく様子も見られた。

乳児では、保育者の関わりや模倣を通して安心して素材に触れ、繰り返しの中で関わりを深めていく姿が中心であった。一方、幼児では自分たちで考えながら遊びを展開し、友だちと関わりながら協力して活動を進めていくなど、より探究的な遊びへと発展していた。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

活動の中で子どもたちは、砂や泥に触れながら様々な表情や姿を見せていた。初めは砂に対して戸惑いを見せる子どもや、触れることをためらう姿も見られたが、保育者が一緒に触れて見せたり言葉を添えたりすることで、少しずつ安心して関わるようになっていった。また、「冷たい」「さらさらしている」など、感触や温度に気付く様子や、砂が崩れる様子をじっくり見つめる姿も見られた。

遊びが進むにつれて、型抜きがうまくできたことを喜び繰り返し試したり、うまくいかない時には保育者に援助を求めたりしながら、自分なりに試行錯誤する姿が見られた。見立て遊びでは、砂で作ったものを食べ物に見立てて「いただきます」とやり取りをしたり、「どうぞ」と友だちに差し出すなど、子ども同士の関わりが広がっていった。

乳児では、保育者の姿を見て真似をしながら遊びに関わる様子が多く見られ、安心できる関係の中で少しずつ遊びを広げていく姿が特徴的であった。一方、幼児では「ここに山を作ろう」「水を流してみよう」といった言葉のやり取りが見られ、友だちと協力しながら遊びを展開する姿が見られた。また、「水が流れない」「崩れてしまう」といった気づきから、自分たちで考えを伝え合い、工夫しながら遊びを発展させていく様子も見られた。

保育者は、子ども一人ひとりの気持ちや発達に寄り添いながら関わり、必要に応じて言葉を添えたり援助を行った。また、すぐに答えを示すのではなく、子ども自身が気づき考えられるよう見守る関わりを大切にし、主体的な遊びの展開につなげていた。

５．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

砂という素材を通して、子どもたち一人ひとりの発達や興味関心に応じた多様な関わりが見られた。初めは砂に触れることに戸惑いを見せていた子どもも、保育者の関わりや繰り返しの経験を通して、安心して関わるようになり、自ら遊びに向かう姿へと変化していった。乳児では、保育者の姿を見て模倣することや、安心できる環境の中で関わることの重要性を改めて感じた。

また、道具の種類や大きさ、環境の設定によって子どもの興味や遊びの広がりが大きく変わることが分かり、発達に応じた環境構成の大切さを実感した。子どもたちは自分なりに試行錯誤しながら遊びを進めており、その過程そのものが学びにつながっていることが見て取れた。

さらに、発達が進むにつれて、子ども同士で関わりながら遊びを広げたり、言葉でやり取りをしながら考えを共有したりする姿が多く見られた。幼児では、砂や水の性質に気付き、「どうしたらうまくいくか」を考えながら工夫するなど、探究的に遊びを深めていく姿が印象的であった。

また、本活動にあたっては、大学の笠間教授より助言・指導を受け、子どもの主体性を引き出す関わりや、環境構成の在り方について学びを深めることができた。保育者自身が意図的に関わり方を見直すことで、子どもたちの気づきや学びがより豊かに広がっていくことを実感した。

今回の活動を通して、砂遊びは感触遊びにとどまらず、想像力や創造力、協働性、思考力など、様々な育ちにつながる重要な活動であることを改めて実感した。今後も子どもたちの興味や気づきを大切にしながら、より豊かな遊びや学びへとつなげていきたい。